

氏 名	和 田 伸 一 郎
学 位 の 種 類	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 254 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 環 境 相 関 研 究 専 攻
学位論文題目	メディアのポテンシャルとその理解 ——表象の近代からテレプレゼンス——

論文調査委員 (主 査) 教 授 佐 伯 啓 思 教 授 篠 原 資 明 助 教 授 大 澤 真 幸

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文の目的は、現代的な技術メディアを用いる体験がどのような潜在的可能性（ポテンシャル）を有するかを理解することにある。現代的な技術メディアとは、遠方にあるもの（ここにはないもの）を像として手元に再現するテレプレゼンス技術のことであり、写真、映画、テレビ、インターネット、そして電話などがこれに含まれる。

現代的なメディアを論ずる従来の社会学や文化研究の議論は、単純化すれば、二つの立場に整理できる。メディアの有用性を大げさに誇張するメディア肯定主義とメディアによる人間疎外を批判する否定主義である。本論文は、現実の使用において汲み尽くされていない——人間にとっての必要性に従属させるべく、飼い馴らされていない——技術のポテンシャルに注目することで、肯定主義・否定主義のどちらにも与さない第三の立場を確立することを目指している。探求に当たって、ハイデガーや（その影響を受けている）ヴィリリオによる哲学的考察が利用されている。現象学の立場からAIやインターネットを批判したドレイファスや、ハイデガーやハーバーマスのコミュニケーション論を援用して携帯電話の問題点を指摘したマイヤソン等、哲学的な議論に依拠するメディア論は少なくない。本論文もそうした流れに属するものと見なすことができるが、表面的な観察からは見失われてしまう、メディアの潜在的で積極的な可能性の意味を理解するために、哲学的な議論への迂回がなされている点に、本論文の特色がある。

この論文でいう「技術のポテンシャル」とは何か。リュミエール兄弟の初期の映画「ラ・シオタ駅への列車の到着」を観た観客は、列車が突進して来ると錯覚し、座席から腰を浮かすほどの恐怖を覚えたという。このように動く映像は不気味さや驚愕をもたらすが、そこに物語が付与されたときには、そうした不気味さや驚愕は背景に退き、抑圧される。ポテンシャルとは、たとえば、物語的な構造化によって隠されてしまう不気味さや驚愕をもたらす映画技術の可能性のことである。

こうしたポテンシャルとしてのメディア技術を用いる経験の構造は、本論文によれば、ハイデガーの現存在に関する分析を用いることで、一般的に抽出することができる。ハイデガーにとって、人間が「ここ」に居るということは、世界へと投げ出されている自己を自己自身が引き受ける覚悟を持ちつつ有るということである。その自己が立っている場所が「現（ここ）」である。テレプレゼンス技術を通じて映像を見たり声を聞いたりすることは、つまり（特にリアルタイム）遠方と繋がっているということは、現存在が「ここ（現）」から脱落することを意味する、というのが本論文の見解である。つまり、遠方を「ここ」へと引き寄せるために、「ここ」にいる現存在は「ここ」にいることを宙吊りにしなくてはならない、というわけである。この「宙吊り」の体験は、さらに、現存在が（もともと彼/彼女がそこから投げ出されていたところの）深淵＝存在へと連れ戻されることではないか、と解釈される。遠方にある像が「いまここ」にやって来るときに、不安や驚きを感じる究極の理由も、この点に求められる。

こうした経験の構造の解釈は、ヴィリリオの議論を用いて補完されている。メディアを利用する現存在は、遠方にいる他者や遠方の風景に自ら対峙させていることになる。この状態は、ヴィリリオの概念に依拠して、次のように記述することもできる。すなわち、現存在としてのメディア利用者は、太陽光に曝し出されているだけでなく、電波の「速度の光」にも

曝し出されつつ「そこ」に有るのだ、と。物陰に隠れれば、太陽光からは逃れることができるが、速度の光からは逃れることができない。

以上に見てきたようなメディアについての現代的な経験は、再びハイデガーに依拠しつつ、歴史的・思想史的なコンテキストの中に位置づけられる。ハイデガーによれば、古代ギリシアにおいて、存在者は「物」として現れていたが、近代以降（デカルト以降）、「用象（役立つもの）」へと変容した。こうした存在者の性格の転換は、近代において、存在者に対する現存在の関係が「表象すること」であったことが与っている。「表象すること」においては、存在者は（自己の前にあるものとして）対象化され、それと相関して、存在者に相対する主体が——対象に先立って有るものとして——捏造される。

一方では、存在者の用象への格下げは、現代の技術時代にますます進行している。しかし、他方では、現代のメディア技術が、現存在を存在へと連れ戻す潜在的可能性を有するとするならば、そこには「表象すること」を越える経験——存在を（遠隔）現前させること——が含まれてもいる、ということが示唆される。こうした可能性が開花するかは、技術が配置される全体的布置（立て組み）に依存するはずだ、との結論が、ハイデガーの技術論を承ける形で導かれる。

以上に要約したように、本論文は、文化研究、社会学、哲学等を学際的に参照しつつ、メディアをめぐる経験の現在と未来を総合的に理解しようとする独創的な試みである。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、現代的な技術メディアを用いる体験がどのような潜在的可能性（ポテンシャル）を有するかを理解することを目的とした、社会学的・社会思想的研究である。現代的な技術メディアとは、遠方にあるもの（ここにはないもの）を象として手元に再現するテレプレゼンス技術のことであり、写真、映画、テレビ、インターネット、そして電話などがこれに含まれる。

メディアを使用する経験を、社会学や心理学の実証データや理論を基礎にして解釈する研究は少なくない。だが、本論文の大きな特徴は、社会学や心理学だけではなく、現代哲学の理論が解釈に援用されている点にある。もちろん、従来から、哲学的な議論を用いて、メディア使用の体験の意味を説明しようとした研究がなかったわけではないが、そうした少数の例外と比べても、本論文の独創性は明白である。たとえば本論文と一見きわめて近い主題を有するごく最近の哲学的な研究である、マイヤソンの『携帯電話とハバーマスとハイデガー』と本論文とを対照させてみると、本論文の独創性が浮き彫りになる。マイヤソンの研究は、携帯電話やインターネットのコミュニケーションを、ハバーマスとハイデガーが描いた本来的なコミュニケーションと対照させながら、批判したものである。これとは逆に、和田の本学位申請論文は、哲学者たちの議論の助けを借りて、現代の技術メディアがわれわれの経験にもたらす積極的な可能性を発掘している。本論文で重要や役割を果たしている哲学者たち、つまりハイデガーやヴィリリオは、一般には、現代のテクノロジーやメディアのあり方に対する鋭い批判者として知られている。だが、本論文は、大胆かつ仔細な読解を通じて、彼等の議論から、逆説的にも、現代メディアの積極的な可能性を弁証する論点を引き出すことができることを示した。

ハイデガーの哲学との関連では、本学位申請論文は、ハイデガーが技術やテクノロジーに直接に言及した（ハイデガー哲学の全体の中では）応用的な部分より前に、まずは、ハイデガーの哲学の根幹とも呼ぶべき「現存在」という着想に注目している。本論文は、人間を「現存在」として捉える理論枠組みが、メディア使用の体験を理解するきわめて好都合な参照点となりうるということを、示したのである。ハイデガーは、存在了解において、「現（ここ）」へと向けた脱遠隔化の作用を重視しているが、テレプレゼンスの機能を有するメディアの使用は、こうした脱遠隔化の作用の攪乱として、つまり現存在の「現」からの脱落として理解できるという。このような「現」からの脱落が、さらに、現存在を存在の深淵へと連れ戻すことになる、との解釈が示される。

こうしたメディア理解を基礎にして、現代社会を、大きな思想史的なコンテキストの中に位置づける展望が提起される。ハイデガーが「世界像の時代」と呼んだ「近代」が、すなわち現存在と存在者の関係を「表象」によって特徴づけることができるデカルト以来の時代が、現在、終わりつつあるという。一見、現在の技術の中で、「表象」を機能させる主客図式は、一層、強化されつつあるように思える。

だが、本論文は、ハイデガーが「立て組み」と呼んだ、技術の置かれた（社会的・物理的な）全体的布置に注目しつつ、

技術の「ポテンシャル」を捉えるならば、現代の技術メディアには、「表象」とは異なる「(存在の) 現前」をもたらしうる可能性が孕まれていることがわかる、と論ずる。さらに、本論文によれば、技術の可能性についてのこうした見解は、ハイデガーの技術論ともよく整合する。

ヴィリリオにとっては、(ハイデガーの場合とは違い)「メディア」は、もともと、中心的な主題である。ヴィリリオは、「速度」の概念をもとにして、(自動車や飛行機などの) 移動のための技術とコミュニケーション・メディアとを一連なりのテクノロジーとして理解する図式を提起している。本論文の独創性は、このような「速度」の概念を基礎におくメディア理解と、ハイデガーの「現存在」の概念を応用したメディア理解との間には、双対的な関係があること(同じことの二つの表現になっていること)を示した点にある。これによって、速度概念の存在論的な含意が明らかになる。

このように、本論文によれば、ハイデガーの議論とヴィリリオの議論の間には、強い論理的な繋がりがあある。さらに、両者をメディア理解のために並列させたことの副産物として、両者の思想史的な影響関係が、テキストの上で確認されている。ヴィリリオの議論を引用するメディア論の文献は、少なくない。だが、ヴィリリオをハイデガーとの関係で言及する研究は従来、ほとんどなかった。本論文は、ヴィリリオのテキストをていねいに、細部まで検討することによって、ヴィリリオがハイデガーを意識していたこと、ハイデガーの議論から明白な影響を受けていたことを実証している。こうした影響関係の発掘は、(メディア理解を通じた) 現代社会論というコンテキストを離れて、思想史的な研究として見ても価値あるものである。

本論文は、現代の技術メディアの意味を理解するために、多様な学問分野の研究成果を横断的に摂取しようとしている。こうした学際性は、本研究科の趣旨にもよく合致している。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年2月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。